

存在と原因をめぐる初期プラトニズムと中観派

——カテゴリー化、構成要素化、普遍化とその否定——

屋敷 紘 一

(一)

私は『比較思想研究』第一八号においてささやかな試みとしてであるがプラトンの著作にみられるプラトンの哲学と『八千頌般若経』とをある視点から比較した。今回はそれに続くものとして初期プラトニズムと中観派とを比較する。プラトニズムとはここではプラトン以外の者によるプラトンの哲学についての理解ないし解釈としておく。また初期プラトニズムの下に私の考えているのはアリストテレスによって、「書かれることのない思想」(*unwritten doctrine*, Arist. Phys. 209b15)と称されたものである。プラトンには著作の形での書くという行為には決して委ねられなかったものがあると考えられ、それは、プラトンによってアカデメイアでの講義ないし問答の対象とされた際に、アリストテレス

その他の者によって記録されたと考えられる。すなわち、「書かれることのない思想」はプラトン以外の者による証言からなるのであるが、しかしそれは、そのように間接的な証言からなるだけに、真にプラトン自身の哲学に属するものとみなされうるかどうか、という点で論争があり、それは未だに決着をみない。⁽²⁾しかしそれにもかかわらず明確に言えることは、「書かれることのない思想」はそれ以後のプラトニズムの原型をなし、特に新プラトン主義に対して決定的な役割を果たした、ということである。

さて、「書かれることのない思想」は証言によると三つの部分からなる。第一部によると、⁽³⁾プラトンは、全存在者とその究極的原理である一と不定の二(大と小)とは次のような関係にあると考えている。目に見えず自然学の対象である物体は、感覚的に知覚されうる物体よりも存在論的に先である。しかし三次元の図形

としてのみの物体、すなわち立体はこの目に見えない物体よりも先である。さらに面は立体の限定として立体よりも先である。次に、線は面の限定として面よりも先である。さらに点は線よりも先である。ところで点は一（単位）に対応する。数は一の多さである。それ故、一（第一の単位）は感覚的物体の最終的な限定である。他方、不定の二は絶対的に無限定なものである。すなわち一と不定の二とは感覚的物体の究極的な構成要素（*braveia*）である。というのは、数は単位の多さとして諸単位からなるように、全存在者はいわば単位としてのこれらの構成要素からなるのである。⁽⁵⁾

第二部によると、全存在者はそれ自体で在るものと対立しているものとに分けられる。対立しているものはさらに反対のものと関係的なものとに分けられる。ここにカテゴリー化がみられることに注目しなければならない。⁽⁷⁾ところでそれ自体で在るもの（人間、馬、土その他）は普遍化によって一へ還元される。すなわち一はそれ自体であるものの最高類である。さて、反対のもの（善いと悪い、正しいと不正の、静止と運動、生と死、その他）はさらにより多くとより少なくということを受け入れることのできないものと、受け入れることのできるものとに分けられる。前者（善い、正しい、静止、生、その他）は普遍化によって等に還元される。また他方、後者（悪い、不正の、運動、死、その他）は同じく普遍化によって不等に還元される。さらに等は一に還元さ

れる。それに対して不等は不定の二に還元される。また関係的なもの（二倍と半分、より大きいとより小さい、より多いとより少ない、その他）は普遍化によって超過と不足、すなわち不定の二（大と小）に還元される。そして同、等、類似が一に続く最高類として、他方、異、不等、非類似が不定の二に続く最高類として位置づけられる。したがって、全存在者、すなわち、それ自体であるものと反対のものと関係的なものとは普遍化によって一とその否定である不定の二（すなわち、多）とに還元される。一とその否定である不定の二とはカテゴリー化の極限であり、全存在者の究極的な原理（*axiōma*）である。⁽¹⁰⁾

第三部によると、十あるいは四までのイデア数（一に続く原理的なもの）は一によって不定の二から生み出される。さらに、派生的なイデア数（例えば、人間そのもの）はこれらの第一次的なイデア数によって不定の二から生み出される。次に、イデア的図形（第一の線、第一の面、第一の立体）が第一次的なイデア数によって大と小（不定の二）から生み出される。さらに、派生的なイデア的図形（火そのもの、その他）は以上の第一次的な図形によって大と小から生み出される。イデア数とイデア的図形とは、次に、不定の二から、数学的事物、すなわち数学的な学問（算術、平面幾何学、その他）の対象を生み出す。イデア数とイデア的図形とは、さらに、不定の二から感覚的に知覚されるものを生み出す。すなわち、全存在者は、一が不定の二を限定することによ

つて、数—線—面—立体という次元の関連に基づいて段階的に生み出される。

さて、以上の「書かれることのない思想」全体から明らかとなるのは、「ある」という概念はカテゴリー化とともに登場するということであり、そして存在するものの存在するあり方における区別がカテゴリー化である。そして究極のカテゴリーは一と多、一と異、有と無という肯定と否定である。ところで、人間の思考はこの存在するものの根拠、すなわち、原因 (*Arten*) の把握を目差そうとする。そして原因は構成要素化と普遍化によって求められる。すなわち、構成要素化によって全存在者の構成要素 (*Avayata*) とされ、普遍化によって全存在者の原理 (*Prinzip*) とされるのが、一と不定の二である。したがって存在とその原因をめぐってその論議の根底で働いている原理的な思维方法はカテゴリー化、構成要素化、普遍化という三つの方法的手続きであり、ここにギリシャ哲学の総決算があると言える。さて、それに基づき古代インドにみてみよう。

(二)

チャーンドーギヤ・ウパニシャッド中のウッターラカの言葉には (6.2.9)、人間および自然的事物は、有 (*asti*) から生まれた熱、水、食物からなるという思想がみられるが、ここに明らかに構成要素化の思维方法がみられる。また同じことはサーンキヤ学

派の原質を構成する純質、激質、翳質やそれから開展された地、水、火、風、虚空についても言える。またヴァイシェーシカ学派の実体の中の地、水、火、風も同様である。

次に初期の仏教に展じてみると、我々は例えば相応部經典『比丘尼相應』中で金剛比丘尼の次のような言葉に出会う (S.N.I.p. 135)。

部分の集合から車という語があるように、もろもろの蘊があることによって有情という仮りの名がある。

また、中部經典の『象跡喻大経』には次のような言葉がある (M.N.I.p. 190)。

友よ、あたかも木材により、つるにより、草により、土によって虚空が囲まれて、家という名を得るように、友よ、骨により、筋により、肉により、皮膚によって虚空が囲まれて、色という名を得るのである。

これらによると、部分の集合によって車や家があるように、個人存在は五蘊の集合によってあるということであり、ここに構成要素化の思维方法をみてとることができる。そしてこの方向を徹底したのが有部の五蘊、十二処、十八界、五位七十五法の体系である。有部の場合、注目に値するのは、抽象概念の実体化されたものを構成要素とする傾向がみられるということである。

次に普遍化についてみてみよう。ウッターラカの有 (*asti*) は、普遍とは言われていないが、一なるもの (*eka*) として、それに

よって生み出される熱、水、食物の多なるもの (batu) と対比されている (62)。ここでは、普遍ということがそれ自体として
 は自覚されていないとしても、普遍の最も重要な条件は満足されて
 おり、かつ普遍が使用されているということができる。次にヴァ
 イシエーシカ学派に展ずると、同 (samanya) と異 (visha)
 が我々の考察の対象となる。実体であること、性質であること、
 運動であること、牛であること、等は普遍 (同) であるが、同時
 に自己の内属するものをそうでないものと異ならしめるものとし
 て差異 (異) でもある。他方、原子等は差異のみのもの (辺異)
 である。また有性 (gotra, bhava) は最高の普遍として普遍のみ
 のものである。すなわちここに明確に普遍化の思维方法がみられ
 る。しかし、注意しなければならないのは、これらの普遍は相互
 に排除し合っていて、ある普遍が他の普遍の類として存在論的に
 それよりも先である、という関係にはないということである。次
 にバルトリハリの『ヴァーキヤパディヤ』をみると、種 (vish)
 は普遍である。また有性 (gotra) は最高の普遍であり、種はす
 べてこの有性において確立される (3133)。しかし種相互の間
 にはある種が別のある種において確立されるということ、すなわ
 ち後者が存在論的に前者よりも先であるという関係はない。種の
 真の類は有性のみである。すなわち、ここには存在論的には二段
 階である普遍化がある。それに対してヴァイシエーシカ学派の場
 合は存在論的には一段階である普遍化である。すなわち、個物か

らの普遍化はあるが、存在論的にはその普遍の普遍はない。他方、
 プラトンの場合は、イデアと一との間には十あるいは四までのイ
 デア数が少なくとも介在すると考えられる。すなわちプラトンの
 場合には少なくとも三段階以上の普遍化がある。次に有部をみて
 みよう。心不相応行の中の同分 (sabhagata) は普遍に相当する。
 世親はこの同分はヴァイシエーシカ学派の同に相応するとして
 いる。⁽²¹⁾ さて、この同分によって有情は有情として、また例えば男
 は男として認識される。またさらにおのおのの法はそれによって
 五蘊の中の、或いは十二処の中の、或いは十八界の中の一つとし
 て認識される。すなわち有部でもひそかに普遍が前提されている
 のである。

最後にカテゴリー化をみてみよう。まず、ウッダーラカである
 が、彼は有 (gotra) からの開展を説くに先立ち、無 (anat) から
 有は生じない、という主張を行なう (913)。すなわち、彼は自分
 の存在論的体系の中から無は退けるが、しかし思考上では有に無
 を明確に対置している。すなわち、ここにカテゴリー化がみられ
 ると言える。またヴァイシエーシカ学派を考えてみると、実体と
 それに内属する性質や運動との間には、「書かれることのない思
 想」におけるそれ自体であるものと対立しているものとの間にみ
 られるようなカテゴリー化がある。また、ウッダーラカにおける
 如く、この場合でも明らかに無は意図して存在論的体系から排除
 されているが、しかし思考上では無は有に明確に対置されている

と考えられる。すなわちここにもカテゴリー化がみられる。次に有部であるが、法を善、不善、無記に分けるところにカテゴリー化がみられる。また、存在する一切のものを実有、和合有、仮有、相待有、名有に分けるところにもカテゴリー化がみられるが、この後者のカテゴリー化の根底にあるのは、法の自性と利那滅という有と無、あるいは常と断の二端のカテゴリーである。

さて、以上から言えることは、古代インドの諸思想においても、その直接の体系の根底にはカテゴリー化、構成要素化、普遍化という方法上の手続きが原理的な思惟方法として働いているということである。

(三)

さて次に、中観派であるが、中観派としては、龍樹、中期中観派の月称、後期中観派、すなわち中観瑜伽派のシャーンタラクシタおよびカマラシーラに限定して考える。中観派、特に龍樹の批判の対象をなすのは——外教は当然のこととして——むしろ何よりも有部である。龍樹は批判の対象となる個々の教説をそれ自体として問題にするのではなく、それらの教説の根底に働いている原理的な思惟方法を抉り出してきてそれを批判する。そしてそれは結局、カテゴリー化、構成要素化、普遍化の批判となっているというのが私の考えである。龍樹は『中論』(23)で次のように言っている。

業と煩惱との滅から解脱がある。業と煩惱とは分別から起る。それら分別は言語的多様性(戯論)から起る。しかし言語的多様性は空性において滅せられる。

この分別や言語的多様性(戯論)とは何であらうか。分別(vibhakti)とは有部によると自性分別、計度分別、随念分別に分けられるが、これらすべてに共通しているのは区別して考えるということである。そしてそれは具体的には私の考えでは存在とその原因(hetu)とをめぐって、カテゴリー化、構成要素化、普遍化がなされるということである。そしてこれを中観派は否定するのである。しかしそれを次にみる前に中観派の自性(svabhava)の定義を検討しなくてはならない。月称は『中論』の註釈『明句論』中の『中論』第五章に関する部分において自性の定義を三つ挙げている。まず第一は牧者や婦女子が認める、例えば、熱さを火の自性とするものである。第二はアビダルマの法の自性である。(26)そして第三は龍樹の次の定義である(『中論』(152))。(27)

自性とはつくられないものであり、また他と関係のないものである。

龍樹はこの厳密な意味での自性の立場から一切を批判するのである。我々は生きて行く上で何らかの形で必ず関係というものを前提せざるを得ないのであるが、この際の関係は龍樹によれば必ず自性を前提とした関係であり、しかもこの自性は、厳密に考えられると、この関係を退けるのである。そしてここから、一切は無

自性である、ということが導かれてくる。次に具体的に検討してみよう。

まず、構成要素化についてであるが、龍樹は『中論』第三、四、一四章において、五蘊、十二処、十八界というものが成り立たないということと自分の自性の定義を適用することによって示している。また構成要素というものは、構成要素の結合あるいは集合を前提とするのであるが、その結合あるいは集合ということの成り立たないことを第一四、二〇章において同じ仕方でも示している。したがって龍樹は彼の自性の考え方から構成要素化という思惟方法そのものを否定しているのである。

次に普遍化であるが、有部の構成要素化は元来普遍化を退ける性質のものである。というのは、全体は部分に依存せずにそれ自体で存在するという考え方なしには普遍というものは存在し得ないのであるが、有部の構成要素化はこの考え方を退けるからである。⁽²⁹⁾すなわち、中観派は構成要素化への論及を通して普遍化を否定していることになるのである。しかし中観派が直接普遍化を否定している場合もある。というのは、シャーンタラクシタおよびカマラシーラによる『真実要義』の中で、瓶や器における土という普遍的なあり方が単なる分別的なもの (kalpanika) として退けられ、それでもってバルトリハリの普遍化が否定されているからである。⁽²⁹⁾

さて、最後にカテゴリー化であるが、龍樹は『中論』第五章

(37) で彼の自性の定義に基づいて通常世間で前提されている自性と他性 (parabhāva 他のもものにおける自性) も、また有 (bhava 自性と他性とを合わせたもの) と無 (abhava) も否定する。すなわち、一と異、常と断というカテゴリーの否定である。このようにして中観派は批判の対象である諸思想の根底にある原理的な思惟方法としてのカテゴリー化、構成要素化、普遍化を自性についての厳密な考え方から否定しているのである。しかしながら、これらの原理的な思惟方法は、元来、我々の内なる分別の骨格をなすものであった。したがって龍樹の否定は、本来、自己否定的なものである。

さて、全体を振り返ってみると、初期プラトニズムの、一とその否定である不定の二という原理の体系と、自性と他性、有と無の否定という中観派の思惟のあり方とは相互に全く対蹠的である。「書かれることのない思想」においては一と否定の二にはまた善と悪が割り当てられ (Arist. Met. 988a14-15)、そして肯定的に評価されるにせよ、否定的に評価されるにせよ、善と悪という二端を超えることはない。ここに倫理的、政治的な、すなわち世俗の哲学の特徴がある。他方、中観派はこの二端を超えることによって、その哲学は宗教的である。

(1) 間接的証言からの再構成に関しては、拙論『プラトンの「不文の

教説」について（早稲田大学哲学会編『フィロソフィア』第七〇号、一九八二年、二一五—二三〇頁）。『アリストクセノスの伝えるプラトンの「善について」の講義』（古代哲学会編『古代哲学研究』第十九号、一九八七年、四〇—四六頁）参照。

(2) 拙論「プラトンの「書かれることのない学説」をめぐっての問題」（日本哲学会編『哲学』第三十九号、一九八九年、八二—九四頁）参照。「書かれることのない思想」の根本の構造はプラトン自身に遡るというのが私の解釈である。

(3) Sextus Empiricus, Adv. mathem. 10, 249-262; Alexander, In Arist. Met., p. 55²-56³ Hayduck; Arist. Met. A9, Δ6, 811, 15; Jamblichus, Protrepticus 6p. 37²-39³ Pistelli; Ps.-Arist., De lin. insecab. 968b5-22, etc.

(4) AがBよりも存在論的に先であるということは、AはBなしで存在しうるが、BはAなしには存在し得ないということである。cf. Arist. Met. 1018b37-1019a4

(5) セクストス・エンプイリコスは第一部の冒頭において(Adv. mathem. 10, 249, 253)「全存在者とその究極的な原理との関係」を語と字母(*συναγωγή*)との関係に相応するものとして「*συναγωγή*（構成要素）」の本来の意味は「字母」ともった。

(6) Sextus, Adv. mathem. 10, 263-275; Simplicius, In Arist. Phys. p. 247²-248³; Diels; Alexander, In Arist. Met. p. 56³⁻²⁰ Hayduck; Arist. Met. 1054a20-32, etc.

(7) 私のここでいうカテゴリー化とは「アリストテレスの『カテゴリー論』においてみられるようなカテゴリーを単にある一つの方向での完成とするような、元のある原理的な思维方法のことであり、」

のことはヴァイシェンシカ学派の六句義についても当てはまる。

(8) セクストス (*op. cit.*, 10, 269)によると「このことは類(*γενος*)と種(*ειδος*)との関係においてとらえることであり、しかもその場合、類は種なしでも存在しうるが、種は類なしでは存在し得ない」という意味で、類は種よりも先である。注(4)参照。

(9) cf. Proclus, In prim. Euclidis Elem. libr. comment. p. 131²-132², 133²-134² Friedlein; Simplicius, In Arist. Phys. p. 453²-454³ Diels; Pl. Phil. 24a-25c.

(10) *ἀρχή* (原語) には「始り」(beginning) という意味がある。

(11) Arist. Met. A6, 9, Z2, A8, M6-9, N1-4; Sextus, Adv. mathem. 10, 276-283; Alexander, In Arist. Met. p. 56³⁻³⁵ Hayduck; Theophrastus, Met. 6a15-b17, p. 12-14 Ross-Fobes; Proclus, In Platon. Parmenidem (interprete G. de Moerbeke) p. 38²-41³ Kiliansky-Labowsky, etc.

(12) 一から四までの自然数はテトラクテュス (*τετρακτύς*) をなすが故。

(13) *τὰ μαθηματικά* Arist. Met. 987b15, etc.

(14) 構成要素化はピタゴラス学派に「普遍化はエレブ学派とソクラテスに、カテゴリー化は両者ともに通ずる」と言える。

(15) 中村元選集〔決定版〕第九巻『ウニニシヤットの思想』春秋社、一九九〇年、二九四—二九五、二九二—二九九頁、参照。

(16) *Vaiśeṣikasūtra* (upaskāra) 1, 2, 4-6; *Prasastapāda*, *Padārtha-dharmasaṃgraha*, *sāmānya, viśeṣa*

(17) 同そのものは同は内蔵しないが故に。*Vaiśeṣikasūtra* 1, 2, 12, 14, 16: *sāmānyavaiśeṣabhāvena*. cf. Radhakrishnan, Indian

Philosophy, Vol. II, 1958, p. 210, "...Generality cannot exist in another generality. ... since that would land us in infinite regress."

- (18) ある種が外延上、別のある種を含んでも、存在論的に先なるものとして分析される訳ではない、すなわち確立する訳ではない。それは恐らく無限遡及を避けるためである。注(17)参照。

- (19) 個物から種への、そして種から有性への普遍化である。

- (20) P. Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣya*, 1967, pp. 67-68.

- (21) Pradhan, *op. cit.*, p. 68, lines 4-5.

- (22) 『國譯達磨大毘婆沙論』大正藏二七卷四二頁。

- (23) L. de la Vallée Poussin, *Mūlamadhyamakakārikās*, 1903, pp. 349-350.

- (24) Pradhan, *op. cit.*, p. 22, line 20.

- (25) Poussin, *op. cit.*, p. 260.

- (26) Poussin, *op. cit.*, p. 267.

- (27) Poussin, *op. cit.*, p. 262.

- (28) ただし有部は、既に指摘した如く、普遍化をもひそかに行なっている。

- (29) Tatvasamgraha, *Bauddha Bharati Series-1*, Vol. 1, 1981, p. 91.

(やしき・こういち)ギリシャ哲学

早稲田大学非常勤講師)